創業85周年記念企画

3世代が繋ぐ、背広の浪漫
ツキムラ物語 PART 12

奈良の町で、親から子へと繋いでいった「洋服店」。そのタスキを受け取った現社長　岸伸彦氏の記憶と共にツキムラの軌跡、そしてこれからをご紹介していくコーナーです。

PRODUCED BY TUKIMURA

ツキムラの歩み

		時代背景
2011年	神戸モザイクにて展示会	「アースマラソン」に挑戦していた間寛平さんが大阪にゴール
	京都ゼスト御池店100日店舗オープン	東日本大震災が発生
	東生駒店をリバーサイドテーラー東生駒としてリニューアルオープン	英ウィリアム王子とケイト・ミドルトンさんが結婚
	けいはんなプラザ店を京都精華本店としてリニューアルオープン	世界各地で皆既月食
	岸伸彦氏が三代目「月村三五朗」を襲名	地上デジタル放送へ移行
	月村三五朗襲名記念店舗肥後橋店がオープン	サッカーのFIFA女子ワールドカップドイツ大会でなでしこジャパンが世界一

前回までのあらすじ
大正14(1925)年、奈良町の一角で創業された「ツキムラ洋服店」。その3代目として生まれた岸氏。20代で店を担い、株式会社ラガゾットを設立した。その後、着々と事業を拡大し、「3着5万円のパターンオーダースーツ」を開発。創業85周年を機に、2011年7月、月村三五朗を襲名した。

1945年頃先代社長

ツキムラを支え続けていた会長から受け継いだ裁断ばさみ

岸氏が月村三五朗を襲名するにあたって、会長であり母である保美さんからあるものを受け継いだ。それは古い裁断ばさみ。会長が嫁入り前から使用していたこのはさみを、自ら丁寧に磨き、それを岸氏に手渡した。そのはさみを見て思い出すのは遠い日の記憶。

中学3年生のとき、父親が突然、病魔におかされた。その頃、岸氏は船に乗って通信士になりたいという夢があったが、父親が倒れて担ぎ込まれて帰ってきた瞬間、すべての運命が狂ったという。

寝たきりとなった父親は枕元に家族全員を集めてこう言った。「これからは店を飲食店にしてお母さんに切り盛りしてもらい、それをお前たちが手伝って欲しい」。それを聞いた母親は、涙をためて怒りだした。「子どもたちは自分らの力で守るもんやのに、なんでそんな情けないことを。私がひとりでツキムラを守っていくから、そんなこと、二度と子どもの前で言わんといて」と啖呵をきった。

それから母は、昼に布地を裁断し、夜には布地を包んだ風呂敷を担いで、注文を受けに回った。岸氏は学校から帰ると受験勉強の傍ら、お母さんと共に風呂敷を担いで電車に乗って、商売を手伝った。「母親は服屋の娘。縫製も裁断もできたけど、自分が主となって商売するのは初めて。生活に追われて必死のおばさんが、そのときのトレンドを追いかけて背広をつくるのは大変だったと思う。商売、職人のコントロール、経営もすべて母親が切り盛りしていた。その時、裁断するのに使っていたのがこのはさみだったんです」。

上の写真は、会長であり母である保美さん。3代目襲名を機に、代々伝わる裁断ばさみを譲った。

岸氏が高校に入ると父親が奇跡的に回復し、高校卒業から23才まで一緒に働いた。たった5年間。父親から背広のロマン、男の美学、人生の考え方を凝縮して教わったという。父親が倒れたときも、他界したときも、終始一貫涙を見せずに気丈にしていた母親は、今日まで決して自らは表に出ず、息子を支え続けた。父親が主になって商売していたときと、23才の岸氏とでは比べ物にならないほど頼りなかったに違いないが、息子のやり方に二言も口出しをせず、ただただサポートをした。その立ち位置にまわれる強い女性だからこそ、岸氏は弱音が吐けなかった。「後向きにならずに、強くまっすぐ歩けと、母親から教わった。だからこそ『お母ちゃんどうしよう』という相談はできず、崖っぷちまで追い詰められて、父親ならどうしたかと自問自答して飛び降りてきた。そんな母子の関係だったんです」と笑う。

「鉄のはさみは使うと温もりがしばらく残る。その温もりと共にこれまでの想いがあるならば、母親から受け取った温もりが冷めないように、僕がはさみを懐で温めて、次世代にこのはさみを渡していきたい。そう思っているんです」。

創業85周年記念企画おわり